収蔵品紹介---

《蒔絵重箱入 発掘品類集》の考古資料―銅鏃・筒形銅器―

細川 晋太郎

1. はじめに

当館には明治18年(1885)に宮内省により買上げとなった、発掘品を収めた重箱である《蒔絵重箱入 発掘品類集》が収蔵されている。これまでに、そのうちの鍬形石および三環鈴について検討を行った〔細川 2022・2023〕。今回はその続きとして、古墳の副葬品として知られる銅鏃と筒形銅器を紹介したい。なお、この《蒔絵重箱入 発掘品類集》に収められた資料個々の来歴については不明である。

2. 蒔絵重箱内の銅鏃・筒形銅器

《蒔絵重箱入 発掘品類集》は、十段一組からなる花柄の蒔絵重箱に、ヒスイ製勾玉や石鏃、青銅鏡をはじめとする考古資料が標本形式で収められたものである。今回紹介する銅鏃と筒形銅器は、それぞれ下から9段目・5段目に積まれた箱にあるもので、銅鏃はヒスイやメノウなどの勾玉とともに、筒形銅器は耳鐶とともに収められている(図1)。



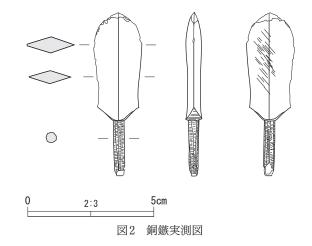


図1 銅鏃および筒形銅器の収納状況

(1) 銅 鏃 (図2、カラー口絵21)

現状 青銅製である。錆の影響による腐食などにより、刃部に欠損している部分が認められるが、全体の形状把握は可能である。また、所々に緑錆が付着しているが、銅自体が著しく粉状化しているわけではなく、遺存状態は比較的良好といえる。銅質は精良で、現状でやや黒みがかっている。表面には土や鉄錆のようなものが部分的に付着している。

法量・形態 全長6.5cm、鏃身長(残存)4.3cm、茎長2.2cm、関高5mm、鏃身幅(残存)1.9cm、くびれ部幅(残存)1.5cm、鏃身最大厚6mm、くびれ部厚5mm、関厚7mmである。重さ(残存)は20gである。



形状は、刃部がS字カーブを描く柳葉形に属する。鏃身の表面は丁寧に研磨されており、光沢がある。なお、鏃身の一方の面では鎬にかけて粗い擦痕が認められるが、緑錆を削っているため、出土後に生じたものと考えられる。

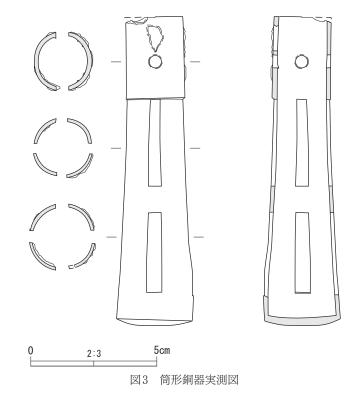
鏃身の断面形態は菱形を呈する。中央に通る稜は刃部先端から関部下端に至る。鏃身上方の最も厚い部分から中ほどにかけて厚みを減じ、関部下端に向かうにつれ僅かに厚みを増す。関部は下端から刃部にかけて緩やかなS字状になる。また、関部下端面には横方向の研磨痕が認められる。茎部の断面は多面形を呈しており、各面に横方向の細かい研磨痕が認められる(カラー口絵21)。茎部先端は切り離された痕跡が残る。

(2) 筒形銅器 (図3、カラー口絵22)

現状 青銅製である。全体的に錆びて変色している。腐食にともなう表面の剥離や口縁および透かしに部分的な欠損が認められる。表面は平滑に整えられていたことが部分的に観察できるが、銅質の劣化が著しいため表面に光沢が残る部分はなく、欠損部では粉状化が進んでいる。また、錆化に加えて土の付着が著しく、研磨痕などの製作技術に関わる痕跡を観察することは難しい。土の付着や銅質の劣化状況から、本品は出土品であると考えられる。

法量・形態 全長12.2cm、口径2.3cm程度、底径3cmである。厚みは口縁部で2mm程度、透かしのある体部で1~2mm程度、底部で3mm程度である。重さ(残存)は100gである。

形状は口縁部と体部からなり、節帯はなく、筒 形銅器の中でも簡素な作りの部類に属する。口縁 端部から1.5cmほどのところには、向かい合うよ



うに2つの目釘孔があり、内面側では目釘孔の縁に鋳バリがわずかに認められた(カラー口絵22)。一方の目 釘孔の上には、湯回り不良によると思われる不整形の孔が存在している。体部には長方形の透かしが上下に 設けられており、それぞれ4方向に開口している。対向する2つの目釘孔は、透かしの開口方向と一致する。 なお、筒内部には柄や目釘の痕跡を示す木質は認められなかった。また、出土品の中では青銅製や管玉など の舌が遺存する例があるが、本品には付属しておらず、現状では内側に付着していた痕跡も見いだせない。

3. 研究史上の位置づけ

ここでは尚蔵館例の観察を通じて得られた情報をもとに、既存の研究成果に沿って製作技術および型式学 的位置について検討する。

(1) 銅 鏃

製作技術 古墳時代銅鏃の製作技術に関する検討は、高田健一氏による研究を挙げうる〔高田 1996・1997〕。高田氏は滋賀県雪野山古墳出土銅鏃の詳細な観察を行い、他古墳の出土事例も踏まえながら製作技術を復元した。尚蔵館例のような有茎式銅鏃の鋳造法は、いわゆる連鋳式と呼ばれる縦1列に複数の鏃を連ねて鋳造する方法が想定されている。尚蔵館例も茎部端において切り離しの痕跡があるため、そうした鋳造法によるものであったと想定される。また、多面形に粗く削られた茎部、関部の外形線がS字状を呈するように整形された痕跡が残ることから、前期古墳から出土した他の柳葉形銅鏃の事例とも共通した製作技術を想定してよい。

型式学的位置 先述の高田氏の検討によると、柳葉形銅鏃では製作工程の省力化を背景にした型式学的変化が確認されており、関の位置が高く厚いものから関の位置が低く薄いものへと変遷が想定されている〔高田 1997〕。尚蔵館例を改めて確認してみると、関の位置は相対的に高く、鏃身部は厚い。また、丁寧な研磨が施されていることから、古相に属する要素が認められる。他の事例と比較すると、高田氏が古相を示す一例として挙げた岡山県浦間茶臼山古墳出土例〔浦間茶臼山古墳発掘調査団 1990〕と平面形状や厚みに共通性が認められる。したがって、尚蔵館例も柳葉形銅鏃の古相の一例と考えて大過ないであろう。

(2) 筒形銅器

製作技術 筒形銅器の製作技術に関する検討は、資料の詳細な観察に基づいた岩本崇氏による研究〔岩本 2006・2008〕および拙稿〔細川 2010〕がある。岩本氏は筒形銅器の観察から、2枚の鋳型を用いる合范鋳造技法による製作技術を復元している。対して、筆者は主に朝鮮半島出土の筒形銅器の観察から、ほとんどのものが蝋型鋳造技法によって製作されたと考えている (註1)。 尚蔵館例の表面は錆化、粉状化が著しいため、研磨あるいは製作技術の痕跡を観察できず、鋳造技法を検討することができなかった。しかしながら、観察から得られた製作技術に関するその他の情報は他の筒形銅器と共通している。

型式学的位置 筒形銅器の型式学的検討については、平面形状をもとに分類を行った山田良三氏による案 [山田 2000]、および目釘孔の方向を製作技術の差と捉える岩本崇氏による分類案 [岩本 2006] がある。尚蔵館例を両氏の分類案に当てはめると、III式(山田分類)、A群(岩本分類)となる。このうち岩本氏よる検討では、目釘孔と透かしが並行するもの(A群)、直交するもの(B群)、目釘孔なし(C群)のものへの相対的順序が、合范鋳造技法を前提として想定されている。ただし、筆者は想定している製作技術が異なることから、目釘孔の方向や有無の違いは製作工人の異同に起因するもので、段階設定を明示できるような編年ができない資料と考えている [細川 2014]。現在までの当該資料にかかる一連の研究等に鑑みれば、古墳時代前期後半(4世紀)~中期初頭(5世紀初)の古墳に副葬された青銅製品の一つとなる。

過去の展覧会図録〔宮内庁書陵部・三の丸尚蔵館 2017〕における画像では、筒形銅器を抑える綴じ紐が目釘孔にかかっており、画像からは学術的な情報が正しく得られなかった。しかしながら、今回の調査で、そうした情報が明らかになったことにより型式学的な検討が可能となった点は大きな意義があるといえよう。

4. おわりに

今回、《蒔絵重箱入 発掘品類集》の中から銅鏃と筒形銅器を対象として紹介を行った。柳葉形の銅鏃については、古墳に副葬される銅鏃の中でも最も出土数が多く、古墳時代前期の副葬品のなかでも年代推定の指標となるものの一つである。そうした資料であることから、尚蔵館例が柳葉形銅鏃の古相に属する例と判明したことは一定の意義がある。出土地は不明であるものの、古墳時代前期前半でも古い古墳から出土したものと推定できよう。

また、筒形銅器については、ここ30年ほどの間に朝鮮半島と日本列島でほぼ同数が確認されており、日韓双方で議論が活発になった器物である。製作地については朝鮮半島製や日本列島製とする考え、あるいはそれ以外の地で製作されたとする考えなど各研究者により見解は異なるが、筆者は日本列島で製作されたものと考えている〔細川2012 b〕。日本列島では、近畿を中心として西は熊本県から東は埼玉県まで分布しており、尚蔵館例の出土地域を絞ることは難しい。ただ仮に日本列島の古墳から出土したものであった場合、この分布範囲を大きく逸脱するものではないであろう。

以上のように、今回紹介した銅鏃および筒形銅器の出土地は不明であるものの、古墳時代前半期の銅製品として重要な資料である。また、資料の考古学的評価が現在のように定まっていなかった頃に、明治天皇がどのような目で本作を見つめていたのかは非常に興味深い。今後はそうした近代の考古資料に対する認識についても考えを深めていきたい。

(ほそかわ しんたろう 当館学芸部調査・保存課研究員)

註

(1) 朝鮮半島 金海良道里447号墳から出土した1点には、明らかな合范鋳造技法による痕跡が確認できる〔細川 2010・ 2012a〕。

主要参考文献

井上主税 2004「金海および釜山地域出土の倭系遺物について」『堀田啓一先生古稀記念献呈論文集』

岩本崇 2006「筒形銅器の生産と流通」『日本考古学』第22号 日本考古学協会

岩本崇 2008「筒形銅器・巴形銅器の製作技術」『考古学ジャーナル』No.570

岩本崇 2013「さまざまな青銅器」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社

浦間茶臼山古墳発掘調査団 1990『岡山市浦間茶臼山古墳』

宮内庁書陵部・三の丸尚蔵館 2017『古代の造形―モノづくり日本の原点』

申敬澈 2013「大成洞88,91號墳의 무렵과 의의」『考古廣場』第13号 釜山考古学研究会(ハングル)

高田健一 1996「古墳時代銅鏃の製作技術」『雪野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査団

高田健一 1997「古墳時代銅鏃の生産と流通」『待兼山論叢』第31号 史学編 大阪大学文学部

高田健一 2013「銅鏃」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社

田中晋作 2009『筒形銅器と政権交替』学生社

細川晋太郎 2010「韓半島出土 筒形銅器の製作技術復元」『科技考古研究』第16号 亜州大学校博物館(ハングル) * 工 芸文化研究所 2014『文化財と技術』第6号 に再掲

細川晋太郎 2012a「삼국시대 倭系遺物의 유통과 부장 고분집단 간 관계」『2012기획특별전 양동리, 가야를 보다』 国立金海博物館 (ハングル)

細川晋太郎 2012b「한반도 출토 筒形銅器의 제작지와 부장배경」『韓国考古学報』第85号 韓国考古学会(ハングル)

細川晋太郎 2022「《蒔絵重箱入 発掘品類集》の考古資料―鍬形石―」『宮内庁三の丸尚蔵館 年報・紀要』第28号 宮内 庁三の丸尚蔵館

細川晋太郎 2023「《蒔絵重箱入 発掘品類集》の考古資料—三環鈴の検討—」『宮内庁三の丸尚蔵館 年報・紀要』第29号 宮内庁三の丸尚蔵館

山田良三 2000「筒形銅器の再考察1999」『橿原考古学研究所紀要考古学論攷』第23冊

《蒔絵重箱入 発掘品類集》—銅鏃・筒形銅器—







21 銅鏃

茎部の研磨痕







22 筒形銅器 内面の状況

考古学、 科学等) に関わる事業・ を題材とし、 た審査をし、 このうち、 掲載内容は、 本紀要の投稿原稿は、 における研究、 博物館学、 関連諸学 採用決定したものを掲載しています。 事業・事例等報告や調査概報について 事例等報告とします。 収蔵品および館の業務に関わるもの 博物館教育、 (美学・美術史学、 および上記以外の館の活動 編集委員において査読を経 博物館情報、 歴史学、 保存

査読はないものとします。

- 当時のものです。 名や作者、制作年などの表記は、 『尚蔵―皇居三の丸尚蔵館紀要』 紀要発行 中、作品
- 丸尚蔵館に属し、本ファイルを改変、再配権は独立行政法人国立文化財機構皇居三の『尚蔵―皇居三の丸尚蔵館紀要』の著作 きません。 布するなどの行為は 有償・無償を問わずで

編 集 委

委員長 員

建

徹

戸 石

田 浩

真 行

愛

瀬 髙 五

梨 味 谷 聖 之

尚 蔵 -皇居三の丸尚蔵館紀要 1〇二四(令和六)年度 創刊号(通号三〇号)

発編 行集

東京 皇 千代田区千代田 0 丸 尚 蔵

館

株 式 会 社 ア イ ワ 1

制 作

Щ \Box I敏之 (株式会社イー・ シー)

北海道札幌市中央区北三条東五-五-

九 ۴

翻訳

一〇二五年三月三一日発行